

森林内の小商品生産と林野所有 — 本郷模範林における介在民有地の事例をもとに —

有 永 明 人
(山形大学農学部林政学研究室)
(平成2年9月1日受理)

Small Production of Commodities in Forest and Forest-ownership — Case Study of Private-ownership in Hongo Forest —

Akito ARINAGA
Laboratory of Forest Policy, Faculty of Agriculture,
Yamagata University, Tsuruoka 997, Japan
(Received September 1, 1990)

Summary

1. Purpose of Study

The purpose of this study is historical re-examination for forest-ownership-system in capitalism of Japan.

2. Object of Study

The object of this paper is in the analysis of historical development for production of commodities in Hongo prefectural model forest management.

3. Composition of this paper is as follows ;

- 1) Preface.
- 2) Hongo model forest-management in Yamagata prefecture.
- 3) Private land-ownership in Hongo Forest.
- 4) Farmer's utilization and forest-ownership.

4. It is resulted from forest-ownership and farmer's utilization that ; On modern age, it is asking to develop sustainable production in forest management.

For that reason, it is necessary various utilization of forest resource.

は じ め に

本稿において検討の対象とした中心的史料は、山形県有本郷模範林に関わる齋藤巖技手の大正2年3月20日付の「復命書」に付された民有介在地の資料である。この資料は、全部で93筆、その面積はわずか8反7畝27歩に関するものであるが、何よりもその資料的価値はその表に記された「作物種類」の項にある。つまり、これらの零細地片の土地は、地目では、全て「畑」と

して登記されたものであるが、その一筆ごとに記された「作物種類」は、当時のその利用状況を伝えるものとなっているからである。

明治30年代以降の国家的林野所有の確定とその近代的森林経営の開始に当たって、こうした森林内の介在地を買い上げすることは一般的な事例であった。そして、これらの土地はいわば山村の自給自足の農地として一括され、あるいはその登記上の名称である「畑」として処理・報告されるのが通例であった。しかし、

本資料が伝える内容は、その一筆ごとの台帳面積の信頼性はともかく、そこに展開された利用形態は、近代的林野所有形成期の農民的林野利用を具体的に示すものである。これらの零細地片は、本来ならば、こうした農地は地租の支払いを義務付ける登記はなされないのが通例であるが、麻畑・桑畑等の小商品作物の利用地であり、明治初期（この場合は10年前後）の地券交付による所有権登記の時期に「畑」として登記されたものであったと考えられる。つまり、このことは当時の山村における自給的農地の他に、この地域ではこうした多様な森林内の小商品生産が、少なくとも幕末期より存在したことを示しているといえよう。

そして、こうした実態を探り明らかにすることに本稿の課題がある。

なお、これらの資料は、牛田大三君の林学科卒業論文『上名川演習林経営史』（1989年）を作成の過程で、山形県林政課蔵資料『本郷模範林（山形大学移管分）』とした綴りの中より発掘したものである。

1. 県有模範林の設置と本郷模範林

(1) 県有模範林の設置

山形県における県有模範林（以下、模範林）の設置は、明治41年（1908年）8月における当時の東宮（後の大正天皇）の「東北御巡幸」を直接の契機とするものであった。すなわち「…県内農業特ニ土地生産業ノ開発…、滋ニ模範林ヲ設置シ林業ノ模範的経営ヲ為シ造林保護利用ノ実施方法ヲ示シ幼稚ナル県下斯業ノ改良発達ヲ

期スト共ニ、県有財産ヲ造成シ、一面国土保護並ニ洪水ノ効果ヲ完カラシメン目的ヲ以テ県内枢要ノ地5ヶ所ヲ図シ模範林ヲ設置シ」（『本郷模範林施業説明書』・大正元年、山形大学演習林蔵）とするものであった。こうした目的のもと明治41年から大正元年の間に、三沢（現米沢市入田沢）、東沢（同山形市関沢）、東根（同東根市東根）、本郷（同朝日村上名川）、真室川（同真室川町川の内）の5ヶ所の県有模範林が設置されている。

これらの設置当時の状況及び現況は表1に示したようになっている。この表に示すように、この5ヶ所のうち、真室川、本郷は、不要存置国有林野処分（それぞれ新庄山林区署、鶴岡山林区署よりの購入）によるものであり、その所有権は県有であった。しかし、残りの3ヶ所は、当時の村有名義の部落有林または共有林との分収契約によるものであり、いずれも地上権が設定されていた。

そしてその発足に当たっては、いずれの場合においても、地元村長との間で「模範林保護委託契約書」が締結されていた。その委託料は「土地より生ず収益」の「百分の五」となっていた。

この模範林の設定は、「林業の模範的経営」の設定、「県有財産」の達成、そして「国土保全と治水」の3つをその名目とするものであった。しかし、後に考察するように、実質的には、「幼稚ナル県下ノ斯業ノ改良発達ヲ期スル」を目的とする「模範的経営」にあり、より端的に言えば当時の政策的課題であった人工造林

表1 山形県有模範林の概況

| 設 定 当 時 状 況 | | | | | | 現 況 (1989年) | | | |
|-------------|---------|-------|----|-------|-------------|-------------|-----|--------|--------------|
| 林 名 | 設定年・月 | 所在町村 | 筆数 | 面積(町) | 備 考 | 番号 | 筆数 | 面積(ha) | 所 有 者 |
| 東 沢 | 明治43. 3 | 東 沢 村 | 11 | 117 | 村有林(分収林) | 1 | 14 | 387 | 山形市関沢財産区 |
| 東 根 | 明治43. 4 | 東 根 町 | 2 | 149 | 国有林(同 上) | 17 | 3 | 405 | 東根財産区 |
| 真室川 | 大正元. 8 | 真室川村 | 14 | 235 | 国有林野処分(県有林) | 30 | 27 | 345 | 山形県 |
| 三 沢 | 明治43. 3 | 三 沢 村 | 30 | 678 | 入田沢共有林(分収林) | 39 | 6 | 423 | 田沢自強会 |
| 本 郷 | 明治45. 3 | 本 郷 村 | 22 | 736 | 国有林野処分(県有林) | ／ | 141 | 753 | 文部省(山形大学演習林) |

注 1) 山形県林政課資料(1989. 2. 6. 調査)「模範林」より作成。なお、本郷模範林については、山形大学本部主計課資料より付加した。

2) また、同上林政課資料によれば、現有県営林はこの他に、関(22ha・米沢市)大平(38ha・米沢市)及び荒砥(11ha・白鷹町)の三ヶ所が存在するが、これらはいずれも郡有模範林として大正初期に設立されたものであり、同10年の郡制度の廃止に伴い県有模範林に編入されたものである。

法の普及と用材林経営の山形県内における定着・拡大にあった。

(2) 本郷模範林の設定

本郷模範林は以上のような県内5ヶ所の県有模範林設置の一環として、東田川郡本郷村大字上名川字早田川地内に設定されたものであった。この林野の取得経過を表2に示した。

この本郷模範林は、明治45年当時の宮城大林区署より、その不要存置国有林野処分として山形県が約742町歩を約16,000円で買い受けたことを起点としている。

庄内地方の地租改正作業は、その当時の歴史的事情(田原音和「ワッパ騒動」・参考文献(6)第三篇第一章第三節・参照)により全国的な展開より数年遅れ、田・畑・宅地は明治9年に完了した。しかし、山林原野は同10年に開始されたが、その土地官民有区分は11年まで延期されている。そしてこの事業において、「山林原野萱場ノ分、地価帖へハ先以官民有之称ヲ不認」(『朝日村史・下巻』p.45)とされ、「下ヶ渡」「貸付」「売買」などの確証のないものは全て官有とされた。この結果、庄内地方においては、平地入会地(河川敷の草苅場等)を含む86%の森林原野が官有地となったとされる(同上 p.47)

こうした経過を経て、当時の山林はこの明治10年代にほとんど全てが官有地とされたのであった。このような事態に対し、旧本郷村は様々な民有引戻し運動を続けた村であった。

そして、明治30年代の初頭の国家的林野所有と国有

林経営の確立を直接の契機とする官民区分の再編成期にその“民有化”に成功している。つまり、明治33年村議会の決議をもって約721町歩の森林原野下戻法による下戻申請し、同36年に201筆1,385町(実際には4,000町歩余あった)の下戻を実現し、本郷村六大字部落有林を設置している。

本郷模範林の設定も、一面では地元の入会権の確保策であり、いわばこうした民有下戻の一環としての性格をもつものであった。また、大正3年には、森林原野下戻による「大針外五字共有林」の192町歩のうち100町歩を対象とする「東田川郡有模範林」(分収林)が設置されている。

すなわち、この明治30年代の国有林野の所有権の確立過程に伴う2つの政策「森林原野下戻」と「不要存置国有林処分」を最大限に利用し、その民有化又は入会権の確保を計ったのであった。こうした明治30年代から40年代にかけての林野所有の再編の中で、本郷村はその林野総面積約8,000町歩のうち、公有林(県有、村有、部落者)5,000町歩、私有林2,000町歩(全て推定値)の膨大な民有林野所有を形成し、国有林は約1,000町歩にすぎないこととなった。こうした旧本郷村の朝日村における特質は表3に示す通りである。

当時の東北地方の国有林成立期の事情からみても希な事例であり、典型的な国有林地帯山村(森巖夫『山村経済論』参考文献(2)・参照)とされる朝日村においても特徴をもつ地区(旧村)であった。

なお、こうした県有模範林の設定それ自体が、農民的林野利用の大宗をなした入会利用の確保の一方法であったことを示す左証として、当時山形県知事馬淵鋭

表2 本郷模範林土地の購入経過

| 字 | 面積(町) | 価格(円) | 備 考 |
|----|------------|-----------|---------------------------|
| 本郷 | 実測742.2312 | 15,848.00 | 明治45年3月国有林野22筆購入(地上産物共) |
| 本郷 | 台帖 0.0400 | 12.68 | 大正元年9月介在民有畑3筆購入 |
| 本郷 | 〃 1.0829 | 32.69 | 同年10月介在民有山林21筆購入(地上産物共) |
| 本郷 | 〃 0.1216 | 63.23 | 同年同月介在民有畑10筆購入 |
| 本郷 | 〃 0.8826 | 383.54 | 同2年7月介在民有畑93筆購入 |
| 本郷 | 〃 13.2308 | 264.65 | 同年10月内務省所管国有地18筆購入(地上産物共) |
| 本郷 | 実測 1.8000 | 46.00 | 同7年3月国有林野1筆購入(地上産物共) |

注)『本郷模範林経営概況』(山形大学演習林蔵)より作成。

この資料の作成年度は不明。その内容から推定して大正12年か13年のものであろう。

尚、この外に大正4年1月には、事務所用地として3畝12歩が上名川地内に購入されている。

表3 旧村別の所有形態別林野面積(1960)

| | 旧 本 郷 村 | 旧 大 泉 村 | 旧 東 村 | 朝日村全体 |
|---------|----------|-----------|-----------|-----------|
| 総土地面積 | 9,882 ha | 28,393 ha | 18,593 ha | 56,868 ha |
| 林 野 面 積 | 7,750 ha | 26,704 ha | 16,842 ha | 51,296 ha |
| 構 成 比 | | | | |
| 国有林 | 14% | 90% | 83% | 77% |
| 公有林 | 62% | 0% | 2% | 10% |
| 私有林 | 24% | 10% | 15% | 13% |
| 林 野 率 | 78% | 94% | 91% | 90% |

注)『1960年センサス』より作成。

太郎と本郷村長伊藤兼吉の間に結ばれた「県有模範林に関する契約書」を稿末の資料に掲げておく。(資料1・参照)

2. 本郷模範林と介在民有地

(1) 民有地買収と買収価格

本郷模範林の設定における土地購入経過は表2に示したが、このうち民有介在地の買収は次の4回に渡ってなされている。

- ①大正元年 9月, 3筆 4反歩 (畑)
- ②同 上 10月, 21筆 1町8畝29歩 (山林)
- ③同 上 同上, 10筆 1反2畝16歩 (畑)
- ④大正2年 7月, 93筆 8反8畝26歩 (畑)

これらは、地目上は「畑」または「山林」であったが、大正4年1月には、「事務所の設置」及び「樹苗の養成」のために「田」3畝12歩が価格100円(坪当たり1円)にて、山元の上名川部落地内に購入されている。

以下において分析の対象とするのは、これらのうち④の大正2年(実際の買収完了は大正4年であった)の筆数93筆(買収時は90筆)、所有者83名(同80名)、買収価格371円余であり、いずれも最大規模の事例であった。

なお、以上の4件の内、「地上産物共」に購入されたのは②の事例であるが、この時の「地上産物」の価格は不明である。しかし、齋藤技手の「復命書」の別の資料によれば、立木杉;10本,材積3.77尺メ(=1.2石)当たり50銭であったとされている。つまり、当時の反当りの買収価格はほぼ、田=300円,畑=30~45円,山林3円,そして「立木杉」は尺メ(約1.2石)50銭であった。

(2) 対象地の買収の経過

本稿の対象とする90筆, 8反7畝27歩の民有介在地の買収は、次の経過によってなされている。

①大正2年2月, 山形県技手, 齋藤巖が現地調査を実施し, 同年2月24日付にて山形県知事小田切磐太郎に「復命書」を提出。(資料2—(1)参照)

②大正2年6月, 山形県議会にその買収議案上程, 同6月11日議決。(案件上程日は不明であるが, 恐らく提案と議決は同一日であったと思われる)

③そして, この買収は大正4年3月20日付の齋藤茂藤治を総代理人とする「契約書」の締結によって終了している。

なお, 前記県議会の議決によれば, 「右本郷模範林用地トシテ前記金額以内ヲ以テ買収スルモノトス」とされ, その「記」は次の様になっている。

畑 7反6畝6歩

但 1反歩45円の割此代金 342円90銭

畑 1反1畝24歩

但 1反歩24円の割此代金 28円32銭

合計 8反8畝 此代金371円22銭

そして実際の売渡代金は, ほぼこの通りに実施されている。

(3) 対象地の利用状況

前記・齋藤巖技手の「復命書」に付された「字早田川荒蕪地内民有地調」(資料2—(2)・参照)の「作物種類」によれば, 当時の利用状況は, 「麻畑」「桑畑」「小豆畑」「糸畑」そして「草生」の5区分に分類されている。このうち「糸畑」とされているのはカラムシ(苧)畑またはアイコ(いらくさ)であったと推定される。(『朝日村史・下巻』p.573参照)いずれにしても,

これらの作物は、その大部分を占める麻畑(筆数45%, 面積47%), 桑畑(筆数24%, 面積27%)に示されるように、これらは当時(明治初期)の商品(換金)作物であった。

これらの「畑」の所有者(=売渡者)の部落別の状況を表4に示しておいた。この表からみると、地形的にこの模範林に接する上名川大針の両部落民の所有するものは少なく、むしろ下流部の下名川、砂川、本郷の住民の所有地が大部分である。また、その取得経過は不明であるが、下流・城下町の鶴岡の紙漉町伊藤新吉の所有地(1畝5歩)が記されている、この所有地は、当時は既に「草生」となっているが、その価格からみて恐らく、和紙の原料としての「楮」ではなく、染料としての「藍」の栽培地であったと推定される(同上p. 572参照)。またこれは、地券交付後に城下町の商人に転売されたものであろう。

表4 民有介在地の大字(部落)別の集計

| 部 落 名 | 所有 者数 | 筆数 | 段 別 (町・反・畝歩) | 地 価 (円・銭・文厘) |
|--------|----------|----|-----------------|-----------------|
| 大字下名川 | 20 | 23 | 0.1724 | 6.110 |
| 大字上名川 | 3 | 4 | 0.0303 | 1.010 |
| 大字大針 | 5 | 5 | 0.0603 | 1.950 |
| 大字砂川 | 21 | 24 | 0.2609 | 8.420 |
| 大字本郷 | 33 | 36 | 0.3313 | 11.340 |
| 鶴岡町紙漉町 | 1 | 1 | 0.0105 | 0.370 |
| 合 計 | 83 | 93 | 0.8727 | 29.200 |

資料：『字上名川荒蕪地内民有地調』(資料2・参照)

より作成

また、この売渡時の所有者当たりの売却額を示したのが表5である。これに示すように80名のうち52名が5円以内であるが、10円を超える者は4名にすぎない。これら3名はいずれも下流部の砂川、本郷部落の住民であった。1位の安達八之丞は3筆2畝余で売渡代金14円85銭、2位の難波利作は1筆3畝余で同14円25銭となっており、この両名はいずれも大字本郷の住民であった。3位は伊藤幸吉で、2畝23歩、12円40銭、4位は伊藤金蔵、2畝28歩、13円20銭でいずれも大字砂川の住民であった。

表5 売払い額階層別の所有者数

| 売却額(円) | 所有 者 数 |
|---------|--------|
| 0～1未満 | 3 |
| 1～2 〃 | 9 |
| 2～3 〃 | 12 |
| 3～4 〃 | 11 |
| 4～5 〃 | 17 |
| 5～6 〃 | 6 |
| 6～7 〃 | 9 |
| 7～8 〃 | 7 |
| 8～9 〃 | 2 |
| 9～10 〃 | 0 |
| 10～11 〃 | 0 |
| 11～12 〃 | 0 |
| 12～13 〃 | 1 |
| 13～14 〃 | 1 |
| 14～15 〃 | 2 |
| 合 計 | 80 |

注1) 資料表4に同じ。ただし、10の2～10の4の3筆は除いてある。

2) 土地売却総額：371.17(円) 筆数90(筆)
土地売却者数：80(人)

(4) 小商品生産と林野所有

以上のような利用状況の分析からすると、これらの地目上の「畑」としての零細地片は、単に地元部落の林野の農業的利用(「入会利用」とは異なる性格を持つものである)。

例えば、先にみた六大字部落有林の森林原野下戻「申請書」は、その入会利用について次のように記している。

「右地所ハ往古ヨリ、本大字大針、同砂川、同本郷、同行沢、同上名川、同下名川、六大字旧八ヶ村入会家職山ニシテ、明治九年地租改正ノ当時マデ数百年來間斷無ク貢米ヲ納メ、純然タル六大字共有ノ民有林ニ相違エ之レ無クニ付…」(『朝日村史・下巻』p. 151～152)と。つまりこの場合は、「家職山」または「稼業山」としての入会山であったことを主張し、その下戻を実現した事例であった。

しかし、本稿が分析の対象とした90筆の民有地は、これらと異なって、既に地券が発行され、私有地とし

てその登記がなされ、所有権が確立していた土地であった。問題はこれらの零細地片の「畑」がどの時点で私権化されたかである。これについては現在のところ確証はない。しかし、庄内地方における地租改正等の歴史的背景から推測すれば、その私有地に地券の交付された明治11年(1878年)頃であったと考えられる。(同上 p.44参照)

地券発行に伴う地租は、当初、地価金の100分の3であったが、明治10年よりは100分の2.5に減額されている。こうした歴史的背景を持ちつつも、当時こうした山間部で、しかもこうした零細地片の土地に地券が発行され私権化がなされていたことは、これらが単なる農民的林野利用としての自給的利用ではなく、商品(換金)作物用地として独自の意義を持っていたことを示すものであろう。

このことは同時に、当時の早田川流域の諸山村は、後に述べる「八尺木」をはじめ幕藩期から、その下流の城下町鶴岡とこうした林野の諸産物の商品生産を通じた経済関係によって結ばれていたことを示すものである。

なお、これらの土地の「台帳面積」と「実測面積」のいわゆる「縄のび」としての差の問題がある。地租改正時においては、その地租の過重負担を避けるために、私有地とくに林野においてはその面積を過少に申請するのが通例であり、その台帳面積は信頼性が薄いのである。本稿の資料の齋藤技手の「復命書」に付された表においても、その実測面積の項目(「見込」)はあるが、結果的にはその1筆毎の数値は記入はされていない。そして、その買収・売渡時においても全て台帳面積によって処理されていることは、こうした事情を反映しているといえよう。

しかし同時に、こうした山間部においては、こうした零細地片それ自体を実測することが意味を持ちえなかったともいえる。従って、その買収価格の設定においては、「地価帳」に記された「地価金」の平均約13倍、「麻畑」「桑畑」及び「小豆畑」については14倍という価格が、その買収に当たっていわば“政治的価格”として決定されたといえるであろう。

この利用状況の総括表を表6に示す。

なお、この本郷模範林は、山形大学の設置にともない、昭和28年(1953年)にその演習林として文部省への無償移管された。この移管時の土地所有関係は現在もそのままであり、その所有面積は合計141筆753.9ha、

うち山林131筆753ha、畑10筆0.9haとなっている。つまり、筆数は減少しているが、この民有介在地の「畑」は地目上変更されることなく現存していることになっているのである。

表6 介在民有地の利用状況総括表・1913(大正3)年

| 利用状況 | 筆数 | (町) 面積 | (円) (A)地価 | (円) (B)買収 価格 | B/A |
|------|----|-----------|--------------|--------------------|-------|
| 麻 畑 | 41 | 0.4004 | 12.91 | 181.05 | 14.02 |
| 桑 畑 | 22 | 0.2314 | 7.50 | 105.60 | 14.08 |
| 小豆畑 | 4 | 0.0327 | 1.25 | 17.55 | 14.04 |
| 糸 畑 | 11 | 0.0711 | 2.37 | 33.15 | 13.98 |
| 草 生 | 12 | 0.0934 | 4.20 | 33.82 | 8.05 |
| 合 計 | 90 | 0.8500 | 28.23 | 371.17 | 13.14 |

注：1) 齊藤厳林業技手「復命書」(大正2年2月24日付)より作成(県林業課蔵・資料2.参照)

2) 買収価格は「契約書」(大正4年3月20日付)より作成(同上)

なお、この買収は大正2年6月の県議会に「不動産買受=関スル件」として上程され同年6月11日に議決されている。

3) 買収価格は次の2区分によっている。

①45円/反 0.7606町 342.90円

②24円/反 0.1124町 28.32円

計 0.8800町 371.22円

なお、総括表の買収価格合計と「契約書」ならびに「県議会議決」の合計の間に5銭のくい違いがある。これは後者の計算ミスであると推定される。

3. 農民的林野利用と林野所有

(1) 家職山と地続山

庄内藩領における農民的利用の林野(山林と原野)は、「家職山」(「稼業山」と「地続山」(同「内林」)に区分されていた。

このうち「家職山」は、「山年貢を納めて薪炭用の木を伐採できる入会山で、青木以外の雑木は伐採自由であったが、青木は役所の許可を必要とした」(『朝日村史・上巻』p.445参照)また「『地続山』は百姓の宅地または田畑に接続した所に植立えた林地で、その

年貢は田畑地租に含まれていたため青木以外の木は自由に伐採でき、又植立者によっては売買も出来た山林であり、『内林』ともいわれている（同上）であった。

そしてこれらの年貢は、「家職山」は村全戸で均等に納め、「地続山」はその所有者が納めることになっていた。先にみた六大字部落有林の「下戻申請」の申請書に記されていた「明治九年地租改正ノ当時マデ数百年来間断無く貢米ヲ納メ」は、この「家職山」の山年貢のことを指しているのである。

また、この他に「村人の願い出によって藩有林を預けて青木を植林させ、成育後の伐採時には五公五民か三七七民の割合で分収する」（同上）「御預山」の制度があった。表2に掲げた本郷模範林の民有地購入のうち、「民有山林21筆（地上産物共）、1町8畝29歩」はこの事例であり、明治10年代にその私有権が成立したものであろう。

(2) 地租改正と土地官民有区分

以上のような藩政下の林野制度を背景に、明治9年の地租改正とこれに引き続く同11年の土地官民有区分の実施過程において、「下ヶ渡」「貸附」及び「賣買」の確証のあった「地続山」の林野に地巻が交付され、その私的所有権が確立された。しかし、この私権化された林野は、いずれも零細地片であり、庄内地方全体では山林原野面積（山林・萱生地・薪林・草生地）の86%は官有地となったとされる。（『朝日村史・下巻』p. 47参照）

そして入会山であった「家職山」の民有引戻しは、明治30年8月の農商務省令第13号の申請手続きの発令を待たねばならなかった（「官有森林原野引戻申請の件」農林省山林局『林野官民有区别処分ニ関スル法規集』引用文献(5)p. 312参照）。そして明治32年4月に新たに公布（法律第99号）された法律「国有土地森林原野下戻法」の第1条は次のようになっていた。

「地租改正又ハ不要存置処分ニ依リ官有ニ編入セラレ現ニ国有ニ属スル土地森林原野若クハ立木竹ハ其ノ処分ノ当時之ニ付キ所有又ハ分収ノ事実アリタル者ハ此ノ法律ニ依リ明治三十三年六月三十日迄ニ主務大臣ニ下戻ノ申請ヲ為スコトヲ得」（同上 p. 293参照）

つまり、下戻の申請は、明治33年6月30日限りの期限つきであり、これまでに申請しなければ行政裁判所への提訴も不可能であった。

先にみた6大字部落有林の下戻申請は、明治31年4

月5日付で、菅原儀三郎外383名（代表難波安彦他2名）で申請を行い、その後、下戻法の第3条の規定（同上 p. 295参照）にしたがって、申請者を本郷村長井上正義に変更して申請して認められたものであった。（『朝日村史・下巻』p. 151～152参照）

この下戻法による申請は、全国的には20,675件総面積200万町歩余にのぼったが、このうち許可をされたものは、行政訴訟で勝訴となったものを含めても、件数で1,732件の8.3%（『山形県史』p. 771第2表・下記・参照）、面積にして15%弱でしかなかった。そのためにこの法律は当時「下戻しないための法律」ともいわれた。（萩野敏雄・参考文献(11)p. 22・参照）

ともあれ、こうした厳しい条件の中で、本郷村を含む東田川郡の結果は、表7に示すように申請件数207件のうち許可件数56件（約27%）と抜群のものであった。また、この件数は山形県全体の許可件数94件の約60%に当たっていた。（『山形県史・本編六』p. 771～772参照）

表7 郡別国有林野下戻申請件数

| | 不許可 | 許可 | 訴訟提起無 | 訴訟提起有 | 取下 | 却下 |
|-----|-------|----|-------|-------|----|----|
| 鮑海 | 89 | 1 | 76 | 13 | 1 | 1 |
| 東田川 | 151 | 56 | 151 | 0 | 2 | 2 |
| 西田川 | 1,533 | 0 | 55 | 1,478 | — | — |
| 最上 | 172 | 1 | 165 | 7 | 7 | 4 |
| 北村山 | 124 | 18 | 85 | 39 | 1 | 2 |
| 東村山 | 44 | 7 | 27 | 17 | 2 | 0 |
| 西村山 | 71 | 1 | 54 | 17 | 4 | 1 |
| 南村山 | 75 | 2 | 56 | 19 | 0 | 1 |
| 東置賜 | 18 | 7 | 16 | 2 | 0 | 0 |
| 南置賜 | 18 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 西置賜 | 6 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 計 | 2,301 | 94 | 685 | 1,592 | 17 | 11 |

（秋田営林局資料より作成）

注）「山形県史・本篇6」p. 772・第3表より引用

(3) 不要存置処分と林野制度

とくに本郷村は、既にみたように不要存置国有林の売却も含めて、こうした民有下戻の成功した希な事

例であった。このことは藩政期における庄内藩の山年貢制度が確立していたことが「民有の証」となったことによるものであろう。また同じことであるが、歴史的には中世村落の山間部集落（大網・田麦俣等）を母村とした17世紀以降の庄内平野の新田開発と城下町の形成といった事情がある。こうした歴史的事情は、その地形的条件もあいまって平野部の水田地帯と山村部の畑作・林野利用を相互に不可欠の依存関係として結びつけるものであった。そしてこうした山村、平野村そして城下町のいわば三位一体としての相互依存関係は、赤川とその支流である梵字川及び大鳥川の河川交通を通じて、「八尺木」（薪材）、「五葉松曲輪」（建築用材）「木炭」などの天然林利用、または「杉」「栲」「漆」の分収造林による植林（『朝日村史・上巻』・第IV章第3節『「山家職」の村』p. 442～535参照）などによって、領主経済のもとで早くから商品生産を基軸とする経済関係として成立していたのである。

本稿がその分析の対象とした県有本郷模範林の民有介在地存在も、こうした経済関係のもとに麻・桑・小豆などの既に藩政期において、農民的小商品生産用地として利用されたものであった。こうした歴史的利用形態の存在が明治10年代の日本資本主義の近代的土地制度の形成期において、林野所有に先駆けて農民的所有＝「畑」として私権化されたものであったといえよう。

しかし、明治30年代に始まる国有林経営の開始を契機とする日本資本主義の森林資源政策は、植林による林野の人工林化として資源政策であり、農業的林野利用をいわば封殺するものであった。そして、こうした森林経営の「近代化」政策の進行は、同時にそれによる絶対的排他的所有権としての林野所有権の確立を基軸とするものであった。こうした政策のもと、「林業ノ模範的経営」は実体的には「義務と恩恵」による半封建的生産関係のもとでの林野利用の人工造林への画一化による「用材化」であり、「人工林化」でもあり、その「近代化」であった。例えばこのことは、この本郷模範林において、その設定後約13年を経た大正12年には、既に202町歩（その総面積の26%）の造林が実行されていたことに示されている。（『本郷模範林経営概況』資料(3)参照・山形大学演習林蔵）

4. 小 括

そして、1986年11月の林政審議会答申「林政の基本

方向—森林の危機克服に向けて」は、こうした人工造林主義による画一的資源造成政策の見直しを提起した。また、現在課題となりつつある森林資源政策と森林施業の転換が、明治期以降のわが国林業の「近代化」路線の破綻の結果であるとするなら、そこからの脱路は当面本稿で対象としたような伝統的利用・生産を事実に基づいて明らかにし、その歴史的再検討をすることがその出発点となるであろう。周知のように、こうした森林内の農民的小商品生産は戦前までのわが国林業においては、薪炭生産とその林野利用によって代表されてきた。

しかし、本稿でとりあげたような、いわば森林内の小商品生産とその林野利用は、各地域において特徴をもって多様な形態で、わが国山山村部に広範に存在してきたものであった。ところが、森林資源の人工林化と絶対的排他的所有としての林野所有権の確立を基軸とする明治期以降のわが国森林経営の「近代化」路線は、その所有林野内にこうした零細な農民的土地所有の存在を容認しなかったものであった。そして、こうした森林資源の木材生産としての画一的・一面的利用は、結果的には森林資源の危機とその生産の担い手としての労働力の不在に示されるように、現時点ではその森林経営は新たな矛盾に逢着している。とすれば、課題とされている森林資源政策の転換と森林施業の多様化の実現のためには、こうした林野制度あるいは林野所有権のあり方それ自体の歴史的再検討を不可欠としているといえよう。（1990年8月30日）

（付記） 本稿の一部は、第41回日本林学会東北支部で報告し、同会誌 No. 41 にすでに印刷・公表されている。有永明人・牛田大三「森林内の小商品生産と林野所有一山形県本郷模範林の事例」（日本林学会東北支部会誌 No. 41, 1989. 参照）

<引用・参考文献及び資料>

（引用・参考文献）

- (1) 佐藤誠朗・志村博康『赤川史』赤川土地改良区連合。1966年
- (2) 森 巖夫『山村経済論』農林出版。1973年。
- (3) 山形県『山形県史・本編6』山形県。1975年
- (4) 朝日村村史編纂委員会『朝日村史・上巻』朝日村。1980年
- (5) 農林省山林局『林野官民有区別処分ニ関スル法規

集』橘書院。1981年(復刻版)

- (6) 菅野 正, 他『東北農民の思想と行動』御茶の水書房。1984年
- (7) 朝日村村史編纂委員会『朝日村史・下巻』朝日村。1985年
- (8) 有永明人・牛田大三『森林内の小商品生産と林野所有』No. 41 日林東北支誌。1989年
- (9) 荒木田光生『森林原野下戻と不要存置処分』山形大学卒業論文。1990年
- (10) 笠井恭悦『公有地官民有区分と栃木県の実施過程』宇都宮大学演習林報告 Vol. 26。1990年
- (11) 萩野敏雄『日本近代林政の発達過程』日本林業調査会。1990年

(資 料)

- (1) 『山形県有本郷模範林関係契約書綴』山形大学演習林蔵。明治45年
- (2) 『本郷模範林施業案説明書』山形大学演習林蔵。大正元年
- (3) 『本郷模範林経営概況』山形大学演習林蔵。大正13年
- (4) 『演習林現況説明書』山形大学演習林蔵。昭和25年3月29日
- (5) 『山形縣立農林専門学校演習林説明書』山形大学演習林蔵。昭和25年10月23日
- (6) 『本郷模範林(山形大学移管分)』山形県林政課蔵

資料1

縣有模範林に関する契約書

山形縣は東田川郡本郷村大字上名川地内に設置したる縣有模範林の保護を本郷村大字上名川同下名川に委託するに付左の契約書を締結す

第一條 縣は左記縣有模範林の保護を本郷村大字上名川同下名川に委託す

——中略——

合計台帳面積貳百八拾參町七反九畝貳拾五歩

合計實測面積七百四拾貳町貳反參畝拾貳歩

民有地買収に伴ひ追加せる分

——後略——

第二條 受託者は前条の山林に於ける火災、盜伐、侵墾その他生産物に對する人為及動植物の諸害を防止する義務を負ふ

第三條 受託者はその地元を設置したる模範林付属苗

圃を保護する義務あるものとす

第四條 保護に要する費用は受託者の負担とす、但し防火線設備、下刈手入れに係るものは県の負担とす

第五條 縣は保護の報酬として林業経営の爲第1条の土地より生ずる収益中立木売却代金の百分の五を受託者に交付す、但し立木を伐採又は裁断、加工の上売却する場合に於てはその費用を控除したる純収益をもって売却代金と見做す
縣に於て立木を伐採して之を自用に供するときは縣は時価により立木価格を評定して之を前項の収益中に加算するものとす

第六條 樹木の伐採、売却の処分及び前条第二項の評定に対しては受託者に於て異議を述ぶることを得ず

第七條 縣は第一條の土地に生産する雑産物を其の区域及び期間を限り受託者に無料以て採取せしむることあるべし

第八條 受託者は山林保護に関する規定を設け契約締結後三十日以内に縣の承諾を受くべし、但し該規定中には看守人の任免、服務及び災害の予防、消防に関する事項等を規定することを要す

第九條 受託者は林業経営及び付属苗圃事業に要する人夫の調達を為す責任あるものとす

第十條 受託者は委員若干名を置き縣の官吏、吏員の委嘱を受け前條の調達その他林業経営上必要なる助力を為さしむべし

第十一條 受託者は左記事項を設定し又は処理したる時に其の都度縣に報告すべし

一、保護に関する細則の設定、改廃

二、委員長及び看守人の命免

三、委員事務所及び看守人駐在所の設置及びその変更

四、災害信号の設置、改廃及び巡勤簿の備付

第十二條 受託者に於て故意、過失又は懈怠により県に損害を生ぜしめたるときはその損害額は第五條の交付金により之を控除し若し不足あるとには之を次年度以降に於て控除し相殺するに至りて止むものとす

第拾三條 本契約の存続期間は明治四拾五年四月より百ヶ年間とす

第拾四條 受託者に於て本契約の義務を履行せざるとき、その他縣の都合により縣は何時にても本契

約を解除することを得。この場合にありては受託者に於て損害を受けることもあるも縣はその責任に任ぜず

右契約の證として正本式通を作り双方署名捺印し各壹通を領有するもの也

明治四拾五年五月六日

山形県知事

馬淵鋭太郎 印

受託保護者・管理者 本郷村長 伊藤兼吉 印

注 1)「山形縣有本郷模範林関係契約書綴」(山形大学

演習林本部蔵, 昭和24年以降演習林関係綴第壹号に集録)より抜粋.

注 2) なお, この契約は昭和25年においても「学校演習林となった後において, なお存在した県と地元民との間の契約慣行」としてその効力が確認されている。しかし, 文部省移管時においてこれらの契約が手続上いかに処理されたかは不明である。(山形県立農林専門学校「演習林現況説明書」昭和25年3月29日・参照; 山大演習林蔵資料)

資料2—(1)

復 命 書

小職儀

依命東田川郡へ出張本郷模範林区内荒蕪地及民有介在地調査候処別紙ノ通りニ候条調査書相添へ此段及復命候也
大正二年二月十四日

林業技手 齋藤 巖 印

山形縣知事 小田切磐太郎 殿

資料2—(2) 字早田川荒蕪地内民有地調

| 字 | 地番 | 地目 | 段 別 | | 地價(円) | 作物種類 | 其ノ他参考事項 | 所 有 者 | |
|-----|------|----|--------|----|-------|------|---------|-------|---------|
| | | | 臺帳(町) | 見込 | | | | 住 所 | 氏 名 |
| 早田川 | 8ノ5 | 畑 | 0.0006 | | 0.060 | 草 生 | | 大字下名川 | 渡部 今朝次郎 |
| 〃 | 8ノ6 | 〃 | 0.0023 | | 0.250 | 麻 畑 | | 〃 | 大 龍 竹 治 |
| 〃 | 8ノ7 | 〃 | 0.0020 | | 0.210 | 〃 | | 〃 | 阿 部 正 寮 |
| 〃 | 8ノ8 | 〃 | 0.0021 | | 0.220 | 〃 | | 〃 | 同 人 |
| 〃 | 10ノ2 | 〃 | 0.0104 | | 0.360 | 〃 | ㊦ | 〃 | 阿 部 半次郎 |
| 〃 | 10ノ3 | 〃 | 0.0104 | | 0.360 | 草 生 | ㊦ | 大字大針 | 難 波 三四郎 |
| 〃 | 10ノ4 | 〃 | 0.0023 | | 0.250 | 麻 畑 | ㊦ | 〃 | 難 波 彦三郎 |
| 〃 | 10ノ5 | 〃 | 0.0110 | | 0.430 | 草 生 | | 大字下名川 | 若 生 八兵衛 |
| 〃 | 10ノ6 | 〃 | 0.0102 | | 0.340 | 麻 畑 | | 〃 | 若 生 健 吉 |
| 〃 | 10ノ7 | 〃 | 0.0020 | | 0.210 | 〃 | | 〃 | 渡 部 治 助 |
| 〃 | 10ノ8 | 〃 | 0.0019 | | 0.290 | 〃 | | 〃 | 渡 部 與之助 |
| 〃 | 10ノ9 | 〃 | 0.0013 | | 0.140 | 〃 | | 大字上名川 | 難 波 熊 吉 |
| 〃 | 11ノ2 | 〃 | 0.0104 | | 0.380 | 〃 | | 〃 | 上 野 善 藏 |
| 〃 | 11ノ3 | 〃 | 0.0114 | | 0.470 | 〃 | | 大字下名川 | 大 龍 竹 治 |
| 〃 | 11ノ4 | 〃 | 0.0100 | | 0.320 | 〃 | | 〃 | 渡 部 久次郎 |
| 〃 | 11ノ5 | 〃 | 0.0114 | | 0.470 | 〃 | | 〃 | 工 藤 重 藏 |
| 〃 | 11ノ6 | 〃 | 0.0100 | | 0.320 | 〃 | | 大字大針 | 太 田 金 吉 |
| 〃 | 11ノ7 | 〃 | 0.0027 | | 0.300 | 〃 | | 大字下名川 | 渡 部 のぶゑ |
| 〃 | 11ノ8 | 〃 | 0.0008 | | 0.080 | 〃 | | 〃 | 渡 部 久次郎 |
| 〃 | 11ノ9 | 〃 | 0.0009 | | 0.100 | 〃 | | 大字上名川 | 難 波 熊 吉 |
| 〃 | 12ノ2 | 〃 | 0.0017 | | 0.180 | 〃 | | 大字下名川 | 渡 部 伊三郎 |
| 〃 | 12ノ3 | 〃 | 0.0026 | | 0.280 | 〃 | | 〃 | 同 人 |

| 字 | 地 番 | 地目 | 段 別 | | 地價(円) | 作物種類 | 其ノ他参考事項 | 所 有 者 | |
|-----|-------|----|--------|----|-------|------|---------|---------|---------|
| | | | 臺帳(町) | 見込 | | | | 住 所 | 氏 名 |
| 早田川 | 12ノ4 | 畑 | 0.0007 | | 0.070 | 麻 畑 | | 大字下名川 | 佐藤 作左工門 |
| 〃 | 12ノ5 | 〃 | 0.0102 | | 0.340 | 〃 | | 〃 | 渡 部 仲 吉 |
| 〃 | 12ノ6 | 〃 | 0.0027 | | 0.290 | 〃 | | 〃 | 阿 部 次郎吉 |
| 〃 | 12ノ7 | 〃 | 0.0015 | | 0.160 | 〃 | | 〃 | 洪 谷 寅 藏 |
| 〃 | 13ノ2 | 〃 | 0.0107 | | 0.390 | 〃 | | 大字上名川 | 齋 藤 作 治 |
| 〃 | 13ノ3 | 〃 | 0.0026 | | 0.280 | 〃 | | 大字下名川 | 渡 部 傳 藏 |
| 〃 | 13ノ4 | 〃 | 0.0017 | | 0.180 | 〃 | | 〃 | 若 生 八兵衛 |
| 〃 | 13ノ5 | 〃 | 0.0122 | | 0.550 | 草 生 | | 大 字 大 針 | 伊 藤 長 藏 |
| 〃 | 13ノ6 | 〃 | 0.0114 | | 0.470 | 麻 畑 | | 〃 | 難波源五左工門 |
| 〃 | 13ノ7 | 〃 | 0.0102 | | 0.340 | 桑 畑 | | 大 字 砂 川 | 伊 藤 熊 吉 |
| 〃 | 13ノ8 | 〃 | 0.0125 | | 0.590 | 〃 | | 〃 | 伊 藤 長 治 |
| 〃 | 13ノ9 | 〃 | 0.0013 | | 0.140 | 〃 | | 〃 | 伊 藤 馬 吉 |
| 〃 | 13ノ10 | 〃 | 0.0014 | | 0.150 | 〃 | | 〃 | 伊藤 茂左工門 |
| 〃 | 13ノ11 | 〃 | 0.0021 | | 0.220 | 桑 畑 | | 大 字 砂 川 | 小野寺 藤太郎 |
| 〃 | 13ノ12 | 〃 | 0.0019 | | 0.200 | 麻 畑 | | 〃 | 伊藤 太郎四郎 |
| 〃 | 13ノ13 | 〃 | 0.0116 | | 0.490 | 桑 畑 | | 〃 | 伊 藤 藏 吉 |
| 〃 | 14ノ2 | 〃 | 0.0119 | | 0.520 | 〃 | | 〃 | 伊 藤 傳 藏 |
| 〃 | 14ノ3 | 〃 | 0.0019 | | 0.200 | 〃 | | 〃 | 菅 原 源 吉 |
| 〃 | 14ノ4 | 〃 | 0.0102 | | 0.340 | 麻 畑 | | 〃 | 伊 藤 辰 吉 |
| 〃 | 14ノ5 | 〃 | 0.0014 | | 0.150 | 〃 | | 〃 | 菅 原 菊 治 |
| 〃 | 14ノ6 | 〃 | 0.0100 | | 0.320 | 〃 | | 大字下名川 | 渡 部 惣兵衛 |
| 〃 | 14ノ7 | 〃 | 0.0104 | | 0.360 | 桑 畑 | | 大 字 砂 川 | 菅 原 菊 治 |
| 〃 | 14ノ8 | 〃 | 0.0028 | | 0.300 | 麻 畑 | | 〃 | 伊藤 利左衛門 |
| 〃 | 14ノ9 | 〃 | 0.0027 | | 0.290 | 〃 | | 〃 | 伊藤 味右衛門 |
| 〃 | 14ノ10 | 〃 | 0.0012 | | 0.130 | 桑 畑 | | 〃 | 伊 藤 多 七 |
| 〃 | 14ノ11 | 〃 | 0.0117 | | 0.500 | 〃 | | 〃 | 伊 藤 金 平 |
| 〃 | 14ノ12 | 〃 | 0.0228 | | 0.940 | 桑 畑 | | 〃 | 伊 藤 金 藏 |
| 〃 | 14ノ13 | 〃 | 0.0028 | | 0.300 | 〃 | | 〃 | 伊 藤 多 七 |
| 〃 | 14ノ14 | 〃 | 0.0025 | | 0.270 | 桑 畑 | | 〃 | 伊 藤 長 吉 |
| 〃 | 14ノ15 | 〃 | 0.0028 | | 0.300 | 〃 | | 〃 | 伊 藤 廣 治 |
| 〃 | 14ノ16 | 〃 | 0.0019 | | 0.200 | 〃 | | 〃 | 伊 藤 長 吉 |
| 〃 | 14ノ17 | 〃 | 0.0103 | | 0.350 | 麻 畑 | | 〃 | 菅 原 松 吉 |
| 〃 | 14ノ18 | 〃 | 0.0223 | | 0.890 | 〃 | | 〃 | 伊 藤 與 吉 |
| 〃 | 14ノ19 | 〃 | 0.0015 | | 0.160 | 〃 | | 大 字 本 郷 | 伊 藤 政 治 |
| 〃 | 14ノ20 | 〃 | 0.0023 | | 0.250 | 〃 | | 大 字 砂 川 | 伊藤 多郎四郎 |
| 〃 | 16ノ2 | 〃 | 0.0011 | | 0.120 | 〃 | | 大 字 本 郷 | 齋 藤 辰之助 |
| 〃 | 16ノ3 | 〃 | 0.0016 | | 0.170 | 草 生 | | 〃 | 難 波 甚 八 |
| 〃 | 16ノ4 | 〃 | 0.0024 | | 0.260 | 〃 | | 〃 | 難 波 藏 吉 |

| 字 | 地番 | 地目 | 段 別 | | 地価(円) | 作物種類 | 其ノ他参考事項 | 所 有 者 | |
|-----|-------|----|--------|----|--------------------|----------------|---------|---------|---------|
| | | | 臺帳(町) | 見込 | | | | 住 所 | 氏 名 |
| 早田川 | 16ノ5 | 畑 | 0.0107 | | 0.390 | 麻 畑 | | 大 字 本 郷 | 菅 原 留 吉 |
| 〃 | 16ノ6 | 〃 | 0.0305 | | 1.010 | 〃 | | 〃 | 難 波 利 作 |
| 〃 | 16ノ7 | 〃 | 0.0118 | | 0.510 | 〃 | | 〃 | 難 波 伊勢吉 |
| 〃 | 16ノ8 | 〃 | 0.0014 | | 0.150 | 小豆畑 | | 〃 | 難 波 松次郎 |
| 〃 | 16ノ9 | 〃 | 0.0010 | | 0.110 | 糸 畑 | | 〃 | 齋 藤 辰之助 |
| 〃 | 16ノ10 | 〃 | 0.0110 | | 0.430 | 小豆畑 | | 〃 | 伊 藤 八十郎 |
| 〃 | 16ノ11 | 〃 | 0.0119 | | 0.520 | 〃 | | 〃 | 難 波 紋 吉 |
| 〃 | 16ノ12 | 〃 | 0.0109 | | 0.420 | 麻 畑 | | 〃 | 小野寺 勘 藏 |
| 〃 | 16ノ13 | 〃 | 0.0105 | | 0.370 | 草 生 | | 鶴岡市紙漣町 | 伊 藤 新 吉 |
| 〃 | 16ノ14 | 〃 | 0.0118 | | 0.510 | 麻 畑 | | 大 字 本 郷 | 庄 司 重 助 |
| 〃 | 16ノ15 | 〃 | 0.0124 | | 0.580 | 糸 畑 | | 〃 | 菅 原 治 七 |
| 〃 | 16ノ16 | 〃 | 0.0024 | | 0.260 | 〃 | | 〃 | 難 波 百 治 |
| 〃 | 16ノ17 | 〃 | 0.0004 | | 0.040 | 桑 畑 | | 〃 | 同 人 |
| 〃 | 16ノ18 | 〃 | 0.0120 | | 0.530 | 〃 | | 〃 | 難波 嘉左エ門 |
| 〃 | 18ノ2 | 〃 | 0.0028 | | 0.300 | 〃 | | 〃 | 難 波 長之助 |
| 〃 | 18ノ3 | 〃 | 0.0014 | | 0.150 | 小豆畑 | | 〃 | 庄 司 政 治 |
| 〃 | 18ノ4 | 〃 | 0.0107 | | 0.390 | 廿歩僅糸畑 残 草 生 | | 〃 | 菅 原 源之丞 |
| 〃 | 18ノ5 | 〃 | 0.0017 | | 0.180 | 糸 畑 | | 〃 | 難 波 豊 吉 |
| 〃 | 18ノ6 | 〃 | 0.0016 | | 0.170 | 〃 | | 〃 | 安 達 八之丞 |
| 〃 | 18ノ7 | 〃 | 0.0101 | | 0.330 | 桑 畑 | | 〃 | 同 人 |
| 〃 | 18ノ8 | 〃 | 0.0112 | | 0.450 | 草 生 | | 〃 | 安 達 金 寶 |
| 〃 | 18ノ9 | 〃 | 0.0009 | | 0.100 | 桑 畑 | | 〃 | 難 波 留 治 |
| 〃 | 18ノ10 | 〃 | 0.0124 | | 0.580 | 草 生 | | 〃 | 上 野 留 吉 |
| 〃 | 18ノ11 | 〃 | 0.0116 | | 0.490 | 〃 | | 〃 | 五十嵐 熊太郎 |
| 〃 | 18ノ12 | 〃 | 0.0006 | | 0.060 | 糸 畑 | | 〃 | 小野寺 與四郎 |
| 〃 | 18ノ13 | 〃 | 0.0017 | | 0.180 | 〃 | | 〃 | 伊 藤 利 藏 |
| 〃 | 18ノ14 | 〃 | 0.0023 | | 0.250 | 〃 | | 〃 | 上 野 民次郎 |
| 〃 | 18ノ15 | 〃 | 0.0101 | | 0.330 | 草 生 | | 〃 | 石 井 多 助 |
| 〃 | 18ノ16 | 〃 | 0.0008 | | 0.080 | 〃 | | 〃 | 小野寺 定 吉 |
| 〃 | 18ノ17 | 〃 | 0.0010 | | 0.110 | 糸 畑 | | 〃 | 小野寺 丹 治 |
| 〃 | 18ノ18 | 〃 | 0.0024 | | 0.260 | 〃 | | 〃 | 難波多郎右エ門 |
| 〃 | 18ノ19 | 〃 | 0.0020 | | 0.210 | 〃 | | 〃 | 小野寺 丹 治 |
| 〃 | 18ノ20 | 〃 | 0.0122 | | 0.550 | 桑 畑 | | 〃 | 安 達 八之丞 |
| 計 | | | 0.8727 | | 28.140 (28.230) | | | | |

注 1) 原資料では地番10ノ2, 10ノ3, 10ノ4は斜線と認印で削除手続きがなされている。

2) 原資料の台帳の計は上記3筆を含めたもので、これらを除く計は0.8500となる。

3) また同じく地価の計は上記の3筆を除いたもので、これらを含めると29円20銭となる。ただし原資料の28円14銭は28円23銭の計算ミスである。